
秒速100m

楼榮 槐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秒速100m

【Nコード】

N1195S

【作者名】

楼榮 槐

【あらすじ】

プライド高い柘榴は自分を屈辱に追い込んだ我心を恨む。

そして入ったゼロ塾。その帰り、柘榴は我心の驚くべき秘密を知る。なんでもできる能力の代わりに人を不幸に陥れる―？

「俺にもその力を分けてくれないか―？」

我心を目の敵にしている柘榴と「友達」という言葉を否定する我心。そんな2人の友情ストーリー―

ブログ

ゼロ塾

それは誰でも知っている有名塾の一つ。
なぜなら塾生数が半端じゃないからだ。

一学年につき三百人でクラス数は十二。

そこに桐生柘榴キリユウザクロは通っていた。

学力を上げるために来ているというわけでもない。

親にはそう言ってごまかしてはいるが。

本当の理由：それは

ただどうしても、気に食わない奴がいる…それだけ

今から4ヵ月前の

中学2年の夏―

「ほら、アイツだぜ」

「ああ、今回の優勝候補？」

「俺、初っ端からアイツとだよ」そんな羨望の眼差しの中に柘榴はいた。

小さい時からクラブチームなどで、陸上をしていた柘榴は、東部大会絶対優勝という肩書きを背負うほどのスター。

そんな柘榴に敵はいないハズだった―

プロローグ（後書き）

初投稿ですがよろしくお願ひします。；；

出会い×憎しみ

予選第一レースが始まった。周りを圧倒させる走りを見せた柘榴は、他の部員を応援することなくグラウンドの端に向かった。真夏の太陽が照りつけ、体力を消耗させる。少しでも体力温存のために体を休めなければならない。冷えたタオルで顔を拭く。その時どこかで奇声が上がった気がしたが、そんな事、今の柘榴には関係ない。

問題は柘榴の2レース目だった。1レース目を勝ち抜いただけあって、有力候補も多い。緊張感が漂う。どこからか豆腐を売る笛の音が聞こえてきた。その静けさの中、隣のコースで走る少年に目が留まった。

肩につくかつかないかの髪ををした、美少年。格好いいとか可愛いとかの類たぐいではなく、丁寧に描かれた絵のように顔のパーツ一つが美しい。誰もが見とれるような顔をする少年に、一体どんな走りができるのか？第一レースを勝ち抜いてきたとは到底思えない。走ったり動いたりするのではなく、むしろ静止したままの姿を保っていてほしい。

全く知らない顔で、長年陸上をしてきた自分でも見たことが無かった。しかしそんなことはどうでもいい。目の前のレースに集中する。

「位置について——」

「用意ドン！！」合図と共に、音が鳴る。

またあのずば抜けた走りを見せようとするが、隣を一陣の風が吹いたようなスピードで駆け抜ける姿を見た。

「嘘だろ!？」心の中で呟くが、どうすることもできなかった。追いかけるが、差は縮まらず、気づいた時にはゴールを当に過ぎていた。

「そんな…」

「優勝候補が負けた？」周りから色んな声が聞こえるのと同時に、ドツと倒れ込む。手を地面につき、拳を握る。自分の調子が悪かったのかとタイムを聞いても、いつもとさほど変わらない。それどころか速くなっている。

オレが：負けた？それも予選二回戦なんかで：

「アイツ誰だ!？」誰かが声を挙げる。がばっと体を押し上げ、野次馬の種になっているその風を睨みつけた。

「お前：誰？」自分を抜いた少年に聞いた。少年は目を見開く。

「そういう時は自分から名乗るべきじゃないの？まあ、知っているからいいけど。桐生でしょ？桐生柘榴。毎年優勝候補っていうぐらいなんだから知っててあたり前か。そういう俺は今回が初出場が無名なんだけど。俺の名前は我心^{ガシン}。俺より速そうな奴は」そこで、少年はニヤリと笑う。

「潰しとかないとね」そう言って去っていった。

「カッケー」

「おいおい、今回の試合どうなっちゃうんだ？」

「初出場だってさ」周りの野次馬の声が刃のように突き刺さる。何も言い返せないこの状況が苦しかった。そんな中……

「俺、アイツ知ってるぜ！同じ塾に通ってんだ。しかも、アイツトッ普!！」

「マジ!？どこ？」その声に振り返る。

「ゼロ塾……」周りが静まり返る。

一瞬で俺の面目を潰したアイツに絶対勝つ。憎しみから解放されるためにも、アイツ以上のことをしなければならぬのなら俺もゼロ塾に行く。そしてアイツにいつか同じ想いをさせてやる。

柘榴×隼都

今となっては柘榴も、ゼロ塾の住人と化している。

それはさておき、この塾では毎月成績順による席替えが行われる。成績が良かった人から上のクラスになるため、皆上を目指して勉強する。

その中でも1番上のクラスというのが定員18名の過酷な修羅場。入ったら入ったで、怒涛の毎日を通^{ミヤギガシ}ごさなければならぬ、各中学の成績優秀者が集まる城。そこに宮城我心はいた。

あんなところに、自分の居場所なんてあるのか。まるで負け犬の遠吠えのようなことを思うのだが。想像ができない：300人の頂点というのは。そこにアイツは上り詰めた。一体どのくらいの勉強をし、どのくらいのIQがあるのか。その全てが未知。謎でしかないアイツに何故そこまで執着しているのか、それさえも分からない。ただあまり良い意味、つまり憧れとかではないのは確かだ。

今回はどうかと、柘榴は貼り紙を囲む野次馬の間から、成績ランキングを見る。

1位：宮城我心

心の中で舌打ちをする。当の自分はというと、132位。成績順でいうと12クラス中の5クラス目。もちろん我心と同じクラスにはまだ1度もなったことがない。入塾した時は186位だったから少しずつ上がっている。このまま上がり続ければ、いずれは我心と同じクラスになれるかもしれない。そんな期待の裏で、自分の不甲斐無さが募る。

何が我心を抜かしてやるだ、何がアイツに近づきたいだ：！！そもそも我心が1位という事実が、気に食わない。何で勉強もスポーツもできるんだ？オマケに顔もいい。

自分の人生を振り返る。勉強もスポーツも中途半端。確かにできないわけではないが、それでも何かできることが欲しいと心から思

っていた。そんな中で見つけたのが陸上。その陸上さえもとり上げられたのは屈辱だった。

プライドを崩したアイツとは同じクラスにもならないため、話すこともない。それでも名前を見るだけで見下された気分になる。それが何よりもイラついた。侮辱という言葉は何よりも柘榴を苦しめる。

「いよっしゃ！！ザックンまた同じクラスやん」いきなり暗い気持ちを跳ね返すような明るい言葉をかけてきたのは、同じ学校同じクラス、おまけに同じ部活のコレガシジュント小東隼都だった。柘榴が入塾するのを知って、一緒に行くように親に言われたらしい。多分、柘榴と一緒にいる時間が一番多い人物だろう。

「なんでオレの方が学力勝ってんのに隼都に内申は負けんだろぅな…」ポツリと柘榴が前々から思っていたことを呟いた。

「それはやな…」オマエの態度がかなり悪いからや…というのはあえて言わなかった。いや…言えない。不思議そうに柘榴は隼都を見やる。

「なんでもないてっ！！」必要以上に手をぶんぶん振り回す。

当人には自覚が無いのだろうが、柘榴の授業の態度は他者から見るととんでもない。少し俯き加減のまま目だけ上に向ける。それだけで柘榴スタイルは完璧だ。教師の目から見れば白目にしか見えな

い。
「ザックンはとりあえず先生に笑みでも浮かべてみたらええんやないの？」

「だーかーらその呼び方やめろっての。しかも笑みって…気味悪いだろ。とりあえず実験してみたら言えよ」ザックンって何だよ。同じクラスになってからというものの、毎回会うたびに言ってくる。関西弁は親譲りだと聞くと、変なあだ名をつけるのも親譲りなのだろうか。

「そないなと言わんといてな。軽い冗談やろ。何やまた宮城の名前見てんのん？ザックンにそんな趣味あったとは思わへんかったわ」

「そんな趣味？んなわけねーよ。お前じゃあるまいし」

「酷いなザックン。俺もそんな趣味あれへんで。まあそうやって宮城をライバル視してんのもザックンらしいっちゃらしいんやけど」

「ライバルなんて思ってるじゃない」

「そうかあ??」そう言ってる、丁度通りかかった我心を見つめる。つられて柘榴も目をやる。向こうはこっちに気づかない。

「はっきりに言って、宮城のこと好きなんちゃうの? いや、あーゆー意味じゃなしに、友達とかいう意味で」

「んなわけねーだろ」嫌がらせかとも言うように見やる。

「でも、嫌いだったら同じ塾なんて入らへんで。その点俺はめっちゃザックンのこと好きやかんな：もちろん友達っていう意味で」隼都が柘榴の首に腕を回す。

「そりゃどうも」嬉しそうな隼都を横目で見ながら、おめでたいヤツだと呟く。俺が我心を友達だと思ってるって? そんな筈ないだろ。プライドを潰すわ、馬鹿にしてくるわ、初対面の相手にまあズケズケと：とりあえず最悪だ。敵としかいえない。

「そういえば次の試合いつやった?」

「来週の土曜だろ。それも忘れたのか」

「いや、確かめたかっただけや」いつになく真面目な隼都の反応に、緊張とも苛立ちとも、とれない感情が波立つ。

「柘榴、今度は勝てるんか? えと：宮城と当たるんは5度目か」

「4度目だって。：さあな。そりゃ勝ちたい。でも隼都だって同じだろ?」

「俺はザックンみたいに速あないし。これでもザックンに期待してるほうやけど」

「バーカ。俺に期待してどうすんだよ」そうだ。俺に期待なんかすんな。実際のところ、隼都のおかげで今までどれだけ助かってきたか計り知れない。だからこそ隼都には成果があってほしい。人に期待する前に自分に自信持てよ、隼都。

一年の春を思い出す。あの時はまだ羨望の眼差しの中にいた。：

と言っても今だって、我心の次には速いのだから県レベルではあるし、あまり状況は変わらないか。まああのときは精神的に安定してた。

初めての先輩という存在にどう接すればいいか分からなくて、同じチームメイトと一緒に頑張るとかっていうのにもイメージが湧かなかった。そんな中、隼都が柘榴に発した第一声が

「片付けは？」だった。柘榴は1年の中でも、段違いに速かったため、誰もが柘榴に注意もしなかった。だから1年がすべき片付けも、よくほったらかしにしていたわけである。

隼都の言葉に

「は？」と聞き返す。

「だから片付け！！」

「選手じゃない奴がやるだろ？」

「柘榴も1年やで。やらんといかんやろ。どんなに強い先輩でも片付けはやってたんや。歴史上の人物の言葉知ってるか？」隼都の熱い語りに、つつい柘榴も笑いが耐えられなくなった。中学に入ってからというものの、初めて笑わしてくれたと思う。それから、柘榴と隼都はよくいるようになったのだ。

「サンキュー隼都：」

「え？」

「何でもない」

「聞かんことにしとくわ」そう呟き、黄色い声が湧き上がる教室に舞い込んだ。

我心（ガシン）の異力（イリヨク）

塾からランニングをして帰るのが柘榴ザクロの日課。陸上の名門校に行くために、家から遠い学校を選んだ柘榴は、そのために寮に住んでいる。塾からの距離は4キロちよつと。柘榴には丁度よいランニングコースである。

いつもと同じ大通りを過ぎ、いつもと同じ細い道に入った。そこに、いつもとは違う出来事が待っているとはその時は知る由よしもなかった。

「おい！！おめーさん、ぶつかっというて何様のつもりだー：ヒック」酔ったような男の声が柘榴の向かう方でした。顔を上げる。2人の人物が柘榴の視界を捉えた。

「すみません」反省はするつもりもないが、謝ってるんだからいいだろうというような感情のない声。間違いない。この柘榴の心臓を高鳴らせるその声は紛れもなく我心ガシン、その人だった。

「それでいいと思ってるのかー？ちよつと来てもらおうか」そう言うって男は我心の手首を鷲掴みした。

「おい：」今度の‘おい’は、我心のものだった。その途端、男は地面に倒れ伏した。柘榴は目を見開き硬直した。我心が颯爽さっそうと柘榴を見やる。

「見てた？」

「：」柘榴は何も答えない。我心はやれやれというようにため息をつく。

「大丈夫、死んでないだろうし」

「どういうことだよ？」柘榴の声は怒りと恐怖で震えていた。

「言わないといけないわけ？」

「知る権利はあるだろ」柘榴は、我心に歩みより、3メートルくらいのところで立ち止まった。我心は笑みを突然止め、強い視線を向ける。

「…あんたも信じないと思うよ。これは、俺の全てが有利なことに
関係してる」

「有利？」

「そつ。知能も才能も、全てにおいて。その能力がある代わりに、
俺にはあるものが欠けた。人生で誰でも手にしたいと思うもの…」
言葉を止める。何だと思う？というように目で問いかけた。

「何？」何かを呑みこむように柘榴の喉が上下した。

「友情さ。生ある者に死を。その言葉通り、俺は孤独の中に生まれ
た」

「何が言いたい？」柘榴の言葉に、我心は道の端に生えている花を
目で示した。

「それを採って俺に渡してみたら分かるんじゃない？」試すような
口振りに、柘榴はイラついた。植物をおもむろに千切り、我心に差
し出す。その手の下に我心は手を広げ花を落とすように言った。月
に照らされひらりと舞い落ちる。その瞬間、我心の手のひらに触れ
た花は、一瞬で朽ち果てた。柘榴は数歩^{あとすく}後退る。

「信じられないだろ？俺の手に触れた奴は…その名の通り潰される」
そう言って、クスクス笑った。

「人を殺して何が楽しい？」柘榴の声からは動揺が感じられた。い
つもの平然さを保てずに、瞳孔を開いたまま、目の前に倒れている
男を見る。

「だから殺してないって。何でもかんでも死ぬわけじゃない。触れ
た奴は死ぬなんて言っていないし。潰すってのは死ぬとはⅡ（イコー
ル）じゃない。それはあんたがよく知ってんじゃないの？」つまり
我心は、“あんたのプライドは潰したけど、あんた自身は殺してな
いでしょ？”と言いたいわけだ。物騒^{ぶっそう}にもほどがある。

「俺は、俺自身だけじゃない。プライドも殺されてない」

「ふーん。それで？」

「いつかお前に勝つ。その意志が潰されてない限り、お前は潰した
とか言える立場じゃない」

「宣戦布告？」そしてまたクスクス笑う。

「さっきの話、子供じゃ危ういけど、大人じゃそうそう死なないってことだから」

「なんか殺したいって言ってるように聞こえる」

「そう見える？」試すような口振りだ。

「殺したことあんのか？」額に汗が滲む。

「まさかね。これでも一度も殺人はしてない。この男も直目じきが覚めると思うよ」そしていつもの人を馬鹿にしたような笑みを向ける。

「信じられない…」

「別に信じなくてもいいけど、他の人に言うようなら、あんた…潰すよ？今度はコテンパンに」

「すぐそう言う…お前にとって、友達って何なんだ？」

「友達？あんた、俺のこと友達って思ってるの？」

「それこそまさかだろ」

「言うと思った。友達ね…俺は友達って存在を嫌悪けんおしてる。その言葉は、とうの昔に記憶のゴミ箱にでも捨てたかな」そういう我心の背後にはブラックホールのような深いオーラが漂ただよっている気がした。顔はいつものように、にたりと笑っているのだが。

「お前に寂しさは無いってことか」

「寂しさ？それは持つてる物を手放した時に感じる…俺には元々無いんだからさ」そう言う顔がいつもの我心ではなく、影がかかっているように見えた。それは柘榴の見間違えではないだろう。

（お前、本当は友達を不幸にさせたことがあるんだろ？）と心の中で問う。その言葉がどんなものかを知っている時点で、我心に寂しさという感情があるのを察した。

「その力って無くすることができないんだろ？逆に伝染はすんのか？」

「心配しなくても、普通に話してるだけではありえない。まあ、しようと思えばいつだってしてあげる」そして嫌みっぽく笑う。初めて見た人だって、サディストさが分かるような笑みだろう。

「俺にもその力をわけてくれないか」

「は？」我心は突然笑みを硬直させた。

「ムカつくんだ、お前を見てると。俺には陸上しかない。なのにお前は陸上さえ奪い取った。苦勞もしないでいとも簡単に」

「この力を持ったところで俺は殺せないよ？」

「んなこと思わねーよ。勘違いすんな。ただ陸上では負けたくない。それだけだ」柘榴は珍しく荒げた声を抑え、元の口調に戻す。

「やめとけば？俺と同じ力を持ったところで、あんたに得なんてない。確かにこのままじゃ俺に陸上では勝てないだろうけど、そんな危険犯すくらいなら、俺が陸上をやめる」

「そんなんじゃない：そんなことしても俺はお前に勝ったことにはならない」

「じゃあ、あんたはただ俺に勝ちたいだけ？」少しの間沈黙が広がる。今宵も煌々（きらきら）と月が照らす。寒さと我心の言葉に冷や汗が伝う。何といえいいのか言葉が浮かばない。それを見かねて、我心が先に話し始めた。

「：さっきのは冗談。この力をコピーするなんてできるわけない」

「嘘を言っても無駄だ」我心が溜め息をつく。俺って嘘つくのに慣れてないのかな？と苦笑する。

「桐生^{キリユウ}。俺はあんた：だけじゃないな。俺は他人に同じ苦痛は味わせない」

「そんなこと言っというて、実際は周りの人をみんな傷つけてるじゃないか」

「それは俺に近づかせないため：」

「人の心を傷つけといてよくもそんなこと言えるな」

「俺は反対してるんだけど」

「流石^{さすが}名前の通り、自分の心を貫き通そうとするのか」我が心。こんなことを貫き通すためにお前の親はそう名付けたんじゃないだろう。

「1つ言っとくけど、人のためを思って反対したのは物心ついてからこれが初めて。だから言う。やめろ」強い想いをこめた瞳が柘榴

を捉える。こうしているだけで喰われそうな勢いだ。しかし柘榴も今までのように怯えなかった。俺にも、俺の強い意志がある。一歩も引くわけにはいけないと。

「…さっきの質問答えてなかったな。“俺に勝ちたいだけなのか”ってヤツ。俺は確かに、お前にムカついてる。だけどそれだけじゃない。更なる上を目指したいんだ。だから、こんなところでお前のような陸上に甘い奴なんかには負けたくない。それだけだ」もう何を言っても無駄だと我心は悟った。久しぶりに負けた。しかも言い争いなんかで。我心は柘榴を視界から外して言った。

「そのために何かを失っても？」

「ああ」その言葉を聞くと、我心は一気に間合いを詰めた。

「あんたも底のない闇に溺^{おぼ}れな」その瞬間、視界が真っ暗になった。我心は前から来たはずなのに、後ろから強い衝撃を感じる。何もかもが逆さまになったように感覚がなくなった。息苦しい。乾いた土が水を吸い込むように、意識が遠のいていった。

我心（ガシン）の異力（イリヨク）2

気がついたら日の当たる部屋で寝ていた。

「起きれるか？ って言うか起つきろー」我心はテーブルに朝食を並べていた。

いつもと変わらない、このけだるさが混じった声。その表面の薄っぺらい笑みの奥に人を避けるような嘲りが見える。

「ああ…。ここは？」

「俺の家」

「なんで…」そう言った瞬間、鋭い頭痛が走った。

「あんた自分で歩いてきたことも忘れたわけ？」

「そうなのか…？」

「あまり考えないほうがいいよ？ 今は、俺の言うとおりにしてればいいんだからさ」名前の通りの自己中さも変わらない。柘榴は立ち上がり、テーブルについた。

「今は、朝飯でも食べて、健康管理すれば？ 話は後でゆっくりと…」柘榴は気にせず卵焼きを口に入れる。

「美味しい…」

「黙って食べれば？」

「人がせっかく褒めて…」そう言った柘榴は、我心が表情を隠しているのに気が付いた。

「照れてんのか？」そう言って鼻で笑う。いつもの仕返しのもりで。

「馬鹿いえ」そう言いながら食器を洗う。

「とりあえずあんたは寝ててくれない？」

「あ、そういえばお前も寮に住んでんだな。やっぱり私立の寮は違うな。綺麗すぎだろ」

「ちょっと…俺の話聞いてる？ っていうかここ寮じゃないし」

「は？」窓の外を見る。明らかに一戸建てとは思えない高さだ。

「…マンションだけど」

「マンション!？」我心はもう聞いてくるなと言うように眉を寄せ
る。

「ほら、寝てなよ」

「マンションに1人暮らし!？お前の家、金持ちだな」

「別に。1人暮らしじゃないし」

「そっか。親どっかで働いてんだな」

「…妙に沢山喋るようになったじゃん」忌々（いまいま）しそうに
目をそらす。確かに個人情報聞きすぎた気がする。悪いと呟いて、
違う話題を探す。

「そういえば話って」

「後」我心は近くにあったスポーツバックを持ち上げ、部屋を出よ
うとした。

「どこか行くのか？」

「部活」

「土曜日なのにな？」

「当たり前じゃん」

「そもそもお前、部活…」柊榴が最後まで言い終わらないうちに、
我心は

「野球」と振り向きもせず言い、扉を閉めようとした。柊榴は驚き
で噎せそうになった。

「陸上は!？」瞳孔が見開き、声が裏返る。我心はやれやれという
ように首を竦めた。

「俺がいつ陸上部って言った？元から野球だし。担任が陸上部の顧
問でさー、気まぐれで出されてるわけ」柊榴は我心を睨みつける。
こっちはお前を抜くの精一杯だったのに、当の本人は優勝という
言葉にさえもありがたみを持たないわけ？

「いい加減な事すんなよ!!」つい言葉を強くしてしまった。

「まあまあ怒んなよ。しょーがないじゃん？ま、俺だって暇つぶし
にはなってるわけだし？学校にも貢献してるわけだから、一石二鳥

「…陸上を暇つぶしだと？その言いようにムカついた。

「おまえ！！」

「だから何で怒ってるわけ？確かにお前は陸上一筋だって分かるけどさ。お前に怒られる筋合いなんてないと思うけど？」

「…」何も言えなかった。確かに、陸上を侮辱するようなことを言ったのは我心だが、それを注意する権利が俺にはあるのか。こんな奴に言われるのは皮肉だが、速くなりたいがためにこの力をわけてもらった自分に言えるはずがない。

「とりあえず、あんまり騒ぐと体壊すよ？」壊すんじゃない、壊してやるよというようにニヤリと笑って扉を閉めた。

☆

物音がして目覚めると、ぬっと覗きこんだ小動物の瞳と目が合った。

「うおっ」驚いて声をあげると、向こうも驚いたように後ろに跳躍する。

「なんだ…これ」黒い生き物が威嚇する。威嚇したいのはこっちだよって言いたいとこだ。

「桐生」我心の声がした。丁度、家に帰ってきたのだ。

「遅い」時計を見ながら声をかける。時計は4時を指していた。

「終わったのが遅かっただけ」

「本当にそれだけか？」柊榴は疑うような目つきをしてみた。本当は遅くなった理由なんてどうでも良かったのだが、ふとからかってみたくなったのだ。

「部長なんだよ」思わぬ答えが返ってきた。

「は？部長！？」こんな奴でも部長になれるのか。

「部長って…。人のこと、考えもしねえお前がか？ありえねー」「そんなの関係なくない？」我心が睨む。普段怒らないせいか、いざ睨まれると迫力がある。

「それにしても黒い…狐？」視線を落とし目の前の生物を見る。

「染められた」誰に？とは聞かなかった。どうせ知らないヤツにだ

ろう。コイツを恨むヤツなんて途方もないくらいいるに違いない。
現に俺がいる。

「お前触れないのにペット飼ってんのか？」

「ペットじゃない」

「あ、悪い。家族か」ペットを飼ってる人はだいたいそれを家族や親友という。現に俺は…と言いたところだが、ペットを飼っていない俺には、どんなものだかなんて分からない。

「違う。ただ餌あげてるだけだし、触れないから飼い主らしいこと
もしてあげらんないし。所謂^{いわゆる}大家？」場所と餌だけは貸していると
いう意味だろう。

「してんじゃん。お前には凄く馴れてんぜ」小動物は我心の足にす
り寄っている。手に触れてはいけないことを、本能で察知している
のかもしれない。

「それで話って？」話を戻す。

「あんたはこれから誰とも接しない方がいい。中学生なら尚更^{なおさら}。下
手したら命も落としかねない」そんなことか。それを予め^{あらかじめ}了承して
るからこの力を受け入れられるんだろ。

「大丈夫だ。そこらの人よりは注意深い」

「俺の言ってる意味分かってるの？」

「たとえ誰かと仲良くしようとも触らなければ平気だしな」柘榴の
言葉に、我心は呆れるような表情を浮かべた。底からの絶望が瞳に
見え隠れしている気がする。それが、これから話す話によるものな
のか、柘榴の思い込みなのかはよく分からなかった。

「あんたこのままじゃ確実に潰れるよ。俺がやるまでもない。自爆
かな。その言葉聞いて俺が後悔してるくらい」

「お前に関係ねーよ。そもそも俺とお前には友情関係なんてない。
俺はお前が嫌いだし、お前は友情を否定してる。それに変わりは無
いだろ。俺の未来は俺で決める。そのくらいの責任ぐらい持ち合わ
せてる。それだけだ」

「ま、勝手にすれば？あんたが何かした時は、俺が潰してあげるか

ら」そしていつもの笑みを浮かべる。

「その時は直々に：ね」

☆

「そんなじゃ、もう帰る。世話になったな」

「もう歩けるわけ？」

「心配御無用」

「いつ俺が心配した？体が丈夫だったことを自分自身に感謝した方がいいんじゃない？けど、気をつけて帰ったほうがいい。この力は磁石と同じ。いつ何時、人に出くわすか分かったもんじゃない」我心は、嬉しそうに言う。まるで共犯の仲間が増えたように。

「お前に言われたくねーな」

「言われたくない言葉をあえてぶつけてるわけ」

「本っ当にムカつく奴だな」そう言うときスニーカーを履いた足でジャンプを試みる。

「よし、行ける。じゃあな」その言葉と同時に柘榴は走り出した。

「あんたはきつと：孤独の闇に堕ちることになる」誰もいない空に、我心はそっと呟いた。

陸上×部活

「ざっくん!! おっはよー」朝一番に声をかけてきたのは、やはり隼都ジュントだった。

「おー、隼都」隼都に伸ばした手を慌てて引っ込める。癖というのは悪い物だ。つつい、大切なことを忘れる。そう柘榴ザクロは心の中で呟いた。

「どーしたん、柘榴？」

「悪い。用事あるの思い出した」とてもベタなセリフだとは思ったが、相手は隼都。ノリで肩を掴んでしまうのも時間の問題だろう。少々、後ろ髪を引かれる思いだったが、隼都を置いて、疾走した。柘榴のスピードには誰も追いつける筈がない。

「柘榴先ば…」

「柘榴!!」

「お早う…」声を掛けられているにも関わらず、柘榴は屋上に駆け上った。

運の良いことに、屋上には誰もいなかった。

「慌ただしい朝に…屋上で過ごすとか有りがちな」柘榴は蒼空そらを見上げて独りごちた。

「…今思えば、人に触らず生きるって難しい話だ」我心ガシンの話を出す。我心は今までどうやって生きてきたんだろう?…やめやめ、そんなこと考える必要ない。我心と俺、お互いのことなんてこれっぽっちも関係ない。我心が隼都みたいな性格だったら考え直しても

いいけど…今のところそれは無さそうだ。
チャイムが鳴る。それでも俺は急ぎもせず、遠くの景色をぼーっと眺めていた。

今日一日の授業があつという間に終わった気がする。いつの間にか部活の時間になっていた。ぼーっとしていたせいか、部活が恨めしかったのか。後者ではないことを願おう。

「ざっくんー、グランド行くで」隼都が真っ先に駆けつけた。

「ああ。今行く」そう言って鞆を肩にかける。隼都に触れない注意をしていることがバレないように心がける。逆に、用心してるのがバレたりな…と心の中で呟く。

「今日は10キロランニングやるのかなー」

「嫌いか？」

「辛いやん。スポーツ万能なお前には分からんやろうけどな」

「バーカ」そう言って、また隼都の背中を叩きそうになった。危ういところで抑え、グランドに向かった柘榴と隼都は、先輩から10キロ馬拉ソンをすることを伝えられた。

「なあー。やっぱりやろ」今度は、隼都が柘榴に体重を乗せるように、後ろから肩を掴もうとした。スレスレで気づいた柘榴は、横に避けたため、隼都はこけそうになった。しかしその間、当の柘榴は大きな溜め息をついていたのだが。

「柘榴、今日お前なんか変やで」

バレたか。心の中で柘榴は舌打ちした。

「は？何が？」それでも知らないフリを突き通そうとする。いつも隣にいる奴に、こんなデマ通じる筈もないが、ダメ元だ。

「ふざけ…」

「おい！話聞いてたか」隼都が言い終わる前に、部長が割って入っ

てきた。

先輩ナーイス。柘榴は心の中でガッツポーズをしてみせる。

「その様子じゃ聞いてないな」隼都のポカンとした顔を睨み、部長はコートの出入り口を指差す。もうすでに、1、2年はランニングに出ていた。

「お前らプラス5キロ」ニヤリと不吉な笑みを見せる部長に、隼都の笑顔もひきつっていた。

「ったく！！ザツクンのせいで5キロも余分に走らせられるなんてなあ」隼都が、走りながら言う。天を仰いで切なそうな目を向けた。「それはこっちのセリフだぜ」その顔したいのは俺だよという気分である。今までで、1番精神力を使った日になりそうだ。色んな意味で頭が痛い。

「そもそも何の話してたんやっけ？」流石隼都：記憶力の無さは抜群だな。いつも困る短所が今だけ救いと化している。柘榴は心の中で呟いた。

「さあな。俺、先行くぜ？」

「そんなー」隼都のペースに合わせる必要はない。とにかく、俺は先輩たちと、早く練習したいんだ。こんなウォーミングアップなんて早く終わらせて。

「ホント、お前は部活に熱いな」隼都は、スピードをアップさせながら去って行く背中に向かって、声を漏らした。

柘榴は、先に10キロを走りに行った部員たちよりも、早くランニングを終わらせていた。もちろん勿論走った距離は、15キロなのだが、全員追い抜いてしまったのである。その癖、息は荒れていない。これは小6の頃からで、我心の異力いりよくとは関係ない。そのせいで入部してから2ヵ月は、多くの先輩から目をつけられていた。今も、数人からは目をつけられてはいるが。

「もう走り終わったのかよ!？」高校3年である峰里ミネサトが柘榴を見かけて、すぐさま声をかけた。柘榴の通う中学校はエスカレーター式で、高校生も同じ場所で練習している。その方が色々と便利なのだ。峰里はこの高校で2位。(…といっても、もともとショートスプリンターの数が少ないのだが 笑)陸上部は高校の部が21人、中学の部が30人で成り立っている。ちなみに、柘榴が1番仲が良い先輩でもある。

「うわ…」時計を見ると走ってから30分くらいしかかかっていなかった。少し気が引ける。

「何自分で驚いてんだよ。やっぱ俺様凄すぎて気分かあ？」峰里がポーズをとってみる。それが面白くて柘榴は腹を抱えて笑った。成程、これが我心からもらった異力なのか。思ったより速く走れたことに驚く。我心はこれを有利だと言った。確かに言えてる。

「それより今、何してんすか」

「んーと、基礎練」

「まだやってんすか」

「お前が早いんだって」

「そんで先輩は…」

「個人練習」そしてにやっと笑ってみせる。

「またですか？」呆れ顔を返す柘榴。

「オレはオレで、自分なりのメニューがあるんだよー」

「端から見れば、ただのサボリじゃないスか。そんな調子で、会津部長抜かせるんスか」

「いいじゃん。3年の特権ー！会津だってそのうち抜かすもん。んで今、オレがするべき練習はねえ…」そして間をとって、柘榴の反応を見る。

「オレと同じくらいの速さのヤツと走ることかにや」

「俺、手伝いましょうか？」柘榴もニヤリと笑い返す。部長である会津焔は、県で1位の実力を誇る。他人に厳しい分、自分にも厳しい。柘榴も入部した時には驚いた。高校の部だから直接話すことは

あまりないが、流石さすが名門校の部長だと感心する。柘榴も、部長には及ばなかったが、峰里にはもう少しで勝てるかも？…と思ったり…。柘榴は、基礎練をサボれるのを良いことに、この誘いに乗ってみた。

「先輩、アップしないでいいんスカ」

「ここ来る前にした」つまり、ちゃんとしたアップはしていないのだろう。

「アップしないと怪我しますよ？」

「そんな時はそんな時」

「お手柔らかに」

「まさか。お前相手に油断できるかよ」そう言いながらコースに着く。

「タイマーは…」

「隼都がいる」柘榴は走り終わった隼都を見つけ、指を指す。思っていたより疲れているようだが、やむを得ない。

「おーい小東ー」

「何ですか」

「タイム測ってくれ」ラッキー。基礎練サボれるー。そう隼都は眩しき、位置に着いた。皆考えることは同じ。基礎練は面倒臭い。他の走り終わった部員が羨ましそうに見ていた。

「位置について」二人の目の色が変わる。瞬間、音が無くなったような空気が周りを包む。集中モード。その雰囲気で、誰も喋ろうともしないし微動だにもしない。

「用意」ざっくん。頑張りや。今日こそ勝つんや。お前ならやれる。2人の速さは部内でも段違いに速い。スタートしてからまだ5秒も経ってないのにあの加速。自分には真似できない。羨ましいっていつも思う。そんな才能があれば…。ざっくんにこう言ったら、才能じゃない、実力だって言われるんやろうな。

異力（イリヨク）×勝負

「ドン！！」

さすが

ミネサト

ザクロ

流石だ、峰里先輩。柘榴は走りながら思った。一步分、峰里先輩の方が速い。でもそう思った瞬間、何かがプツンと切れたように、自分のスピードが変わったのを感じた。

おいおい嘘だろ！？峰里は自分の目を疑った。後ろから迫ってきた足音に気づき振り向いたが、そこには柘榴の姿はなく、自分の歩幅の二倍は先にいた。

「そうはさせねえぞ」峰里は呟き、更に加速した。しかし、柘榴には近づくどころか遠ざかる一方で、ちっとも差は縮まらない。まるで時の悪戯で…自分だけが止まっているようで…

いたずら

「ゴール！！」その声で、自分がゴールを過ぎたことに気づいた。

自分とゴールまでの距離なんて関係なかった。見ていたのは柘榴。それも自分をやすやすと抜き去った後輩。

さよなら

「マジかよ…負けたのかよー！！」潔く負けを認めた。認めないようならば最初から誘わなければいい。どこかの先輩は、手加減を理由に、自分が負けたことを認めなかった。そんな奴になりたくない。認めなければ自分も前進するはずがない。ならばいつそ、自分の志に従いたい。

「すごいなあ。峰っち先輩に勝ったんやでー！！」隼都が柘榴にタイムを知らせるために、目を爛々（らんらん）と光らせて近づいてきた。

「ああ…」

「柘榴？」もつと喜べよというように、隼都は眉をよせる。

峰里先輩に勝った。さっきの感覚を思い出す。あの切れた感じは？人間の限界線っていうのがあるとしたら、その線が切れた感じ？つまり人間を超えたという…

もしかしたら、この力さえあれば部長にだって勝てるかもしれない。いや、全国大会進出だって夢じゃない…！！

でもどうして―？心の中に問いかけてみる。
どうして…嬉しくないんだろ―？

目を見開いたまま硬直している柘榴に、

「ま―たまた―！嬉しすぎて言葉も出ないってか―？幸せな奴だな――！」と、隼都は背中にと突いてきた。

ドサツ…鈍い音が柘榴の背後で聞こえた。

「おい！！小東！！」いち早く気づいた峰里が隼都を揺さぶる。柘榴は動けなかった。すぐに気づいた。今、自分の手に触れたのだと。自分のせいで隼都は倒れたのだと。その姿を、茫然と見たまま、一歩も動けなかった。いや、本当は自分が化け物に見えて動けなかったのだ。

「柘榴！！先生呼んでくれ！！…柘榴！？」「柘榴は、もう目を見開いてはいなかった。光が眩しいように、目を細めている。その瞬間、気を失って倒れた。

異力（イリヨク）×犠牲

「いい加減：起つきろー」^{ザクロ} 柘榴は目を開けた瞬間に我心の平手打ちにあった。^{ガシン}

「痛い^{いて}な。もう起きてるっつの」

「あー悪い。ここは学校裏の…」

「んなの見りゃ分かるだろ。ってか、棒読みで悪いって言われても嬉しくねーよ」我心の平手打ちにあった頬をさすりながら^{つひや} 呟く。どうやら学校裏にある神社の木の陰に寝かされていたらしい。

「夢…か」

「残念リアル」力の抜けかけた身体^{からだ}を勢いよく起こす。

「ちよっと待てよ！！」

「落ち着けて…まずは礼を言うところじゃないの？」

「それどころじゃ…^{ジュント}隼都は？」我心は後ろを向き、数歩柘榴から遠ざかった。

「あの倒れてた奴か：死んだ」重い鈍器で頭を殴られたような気分だった。我心の力をコピーしたときとは別の、心臓^{えぐ}を抉られるような痛みを感じた。

「なんてね」突然クルリと振り向き、柘榴の顔を見る。

「は！？」

「今頃病院かな」

「死んでない…のか？」耐えきれなくなったのか、我心が笑いながらひーひー言っている。よほど、柘榴の反応が面白かったらしい。

「気絶。自分の仲間なら、勝手に俺の話信じて殺すなって」

「…！！冗談なら冗談って早く言え！！」

「あー悪い悪い」我心は素知らぬ顔、その上棒読みで答えた。自分で言った冗談にさえも無関心のようなのだ。

「お前、絶対悪いって思ってたねーだろ。それで？俺は何でここに
いるわけ？」

「あんたの先輩、何で俺のことを知ってたの？突然、『お前我心だ
ろ』って聞かれたから驚いたね」

「は？お前の名前くらい、こちらの陸上部だったら知らないヤツな
んているはずないだろ。それで：まだ質問に答えてねーぜ。何で、
我心がここにいるんだよ？」

「さあ？」

「さあって：」

そう言う柘榴に、突然我心は真面目な顔をした。

「そんなことより：桐生^{キリユウ}、これからどうするつもり？」

「は？」

「人に触れたらどうなるか、身をもって知っただろ？これが副作用。
この異力^{イリヨク}の：」

「分かってる」我心の言葉を柘榴が遮る。

分かってるだと？笑わせるな。我心は心の中で呟いた。自分のせいで、周りの人間が不幸になるんだよ？そんな力を分かってるなんて一言で片付けてしまって良いはずがない。分かってるなんていう言葉は、そう軽々しく口にしてはならない。そんな言葉は油断しているがゆえに発せられる。だから足下をすくわれるんだよ。

「ふざけるなよ？今回、あんたの仲間が生きていたのは、俺のコピーってこともあるだろうけど、アイツの運が良かっただけ。生命力に長けているとかさ。いくらコピーと言っても人に害を及ぼす力がないわけではない」

「だから：」

「あんたは分かっているじゃない」いや、分かっているじゃないんじゃない。分かっているじゃないんだ。その言葉をお前が今度発した時、それは命を落ち葉のように無数にある朽ちたものだと感じた時。そうならないでほしい。だから俺はあんたを助けなくてはいけない気がする。決して口にはできないが。

「性に合わない」と小さく呟いた。

「何が？」

「…」我心は舌打ちをした。何で俺があんたのために悩まないといけないんだ。自分の疑問に苛立ちが増してくる。ちくしょう。心の中で憤^{いきん}つてみるが、ストレスは解消できない。

「あんたのような性格だったらね」

「いきなり何だ」柘榴は、驚いたように声のトーンを上げた。

自分でも、何を言っているのか：分からなかった。

「：何でもない。俺はもう帰るし。あんたはナントカって言う奴のところに見舞いでも行けばいい」

「隼都だよ！！それに言われなくなっちゃって行く」言い終わった頃には、我心は背を向け、角を曲がって見えなくなっちゃってしまっていた。

「：もっと感心もてよ」柘榴は、誰もいない道で、我心がいるだろう方向に呼びかけた。

我心が行ってしまった後、柘榴はその場に崩れ落ちた。

「何でだ：。何で関係ない隼都が不幸になるんだ：！！」髪を無造^{むぞ}作^{うさ}に掴^{つか}む。柘榴は、我心の言葉に焦りを感じていた。実際、どうすれば良いのかも分からなかった。ただ、その場しのぎで我心に嘘をついた。嘘は好きではない。後悔ばかりする。あの時、弱さを言葉にしても伝えるべきだったのか？その疑問が脳裏をよぎった。いや、そんなことしても無駄だろうな。何があっても我心は我心だ。きつと、自分のことにしか興味がないに決まっている。だからこそ相談なんてできない。

電柱に停まっている鳥が嘲^{あざけ}り笑うように飛んでいった。あんな風に我心も笑うかな。

「：もう、今まで通りの生活にはないだろうな」そう吐き捨てて、無理に笑顔を作ろうとする。思うように、上手くできなかった。

「オレって思ってたより：脆^{もろ}い」苦笑いを止め、唇の端を噛む。そして柘榴は固い決断をした。人に迷惑をかけるくらいなら、俺はあえてかわす。悪いふりをしたっていい。すれ違ったっていい。だから

ら、

「隼都を助けて下さい」

神様に強く祈った。

異力（イリョク）×why

「オッス柘榴^{ザクロ}！」

「オス」

「おはよー柘榴ん」

「おー」

「お早うございます柘榴先輩」

「ああ」いつものように挨拶に囲まれる俺。でもその中に、俺をざつくんと呼ぶお馴染みの姿はなかった。

「隼都^{ジュント}は？」隼都の隣の席に座っている高田俊平^{タカダジュンペイ}に聞く。みんなからは高俊と呼ばれているが、隼都はタッシーと呼んでた気がする。

「え？知らないぜ？来てないんじゃない？」

「そっか」それもそうだろうな。人に触って気絶するなんて、夢にも思わないだろう。たとえ、それに気づいてなくても、あの健康第一な隼都が倒れたんだ。1日くらい休んでも不思議じゃない。

「隼都が休むとか珍しーよなー。小学校の時にも休んだ記憶ないぜ？」

「そういえば、高俊同じ小学校だったんだな」

「そだね。休んだ理由知ってる？」

「なんで俺が…」

「いつも一緒にいるじゃん」いつも一緒か…。そういえばそうだったな。休んでる理由、知ってたって言う筈がない。実際、昨日見舞いにさえも行っていない。どんな顔で行ったらいいか分かんないし。寧ろ迷惑じゃないかと何かに囁^{ささや}かれてるようで、行こうとも思えなかった。ただ人を傷つけたことを悔やんで1人歩きしてた気がする。チャイムが鳴る。いつもと同じ筈の1日が、苦痛に紛れて自問自答の繰り返し。英語の時間、いつの間にかWhyという単語を目で追

っていた。何故起きた？事の発端は？何故こんなことに？隼都を傷つけた？

知ってたんだ。自分が悪いんだってことくらい。でもそう考えると辛くなって、闇に押しつぶされるような痛みがのし掛かる。それはまるで死の呪文のように、時間が経てば経つほど、俺の命に喰らいついている気がした。

「ナイス！我心^{ガシン}」

「あざーす」考え事をしていたせいか、どんな球を投げていたのかも覚えてない。確か、ナックル（無回転球）だった気がする。小さい頃、プロ野球の試合で魅^みせられた、一番好きな投げ方。小さいうちに変化球とか投げるのは肩を痛めるからやめた方がいいっていう周りの声も聞かないで練習に没頭してさ。世間の驚嘆の目を見て楽しんでいたのかもしれない。どうせ忠告なんて聞いたところで、俺は周りの人間と違う。普通じゃない。だからと言って、凄い力だとも思っていない。こういうものは、持っているものから見れば欠点しか見つからないのに、持っていないものから見れば羨ましく感じるんだ。だからか、俺は平等な世界に憧れ、追い求めていた。だけど、桐生^{キリユウ}は違った。あいつは1位に固執している。だからこそ面白いと感じたのかもしれない。自分の世界には考えられない人間……。友達なんて必要ないという考えを捨て去って、もっと知りたいと思うくらいに興味がある。人間を農作物と例えるなら、この力は不作物としか言いようがないけど。俺に上なんて必要ないから、この不作物を無くしたい。でもあいつは、犠牲を払ってでも上に立ちたい。その違いに魅力さえ感じる。

「我心、休憩するか」キャッチャーの津川^{ツガワ}が手を止める。

「まだ投げれるけど」

「お前さっきの、ナックル投げたつもりだろ。いつもより、回転微

妙にかかったたぜ？あと、先輩にはタメ口聞くなって、前言わなかったか？」

「言った？あ、言いましたっけー」我心は、聞いたふりをしながら、視線を流す。しかし、その視線の先に、思いもよらない者がいた。

「宮城：ちょっと来いよ」苛立ちと息苦しさが混じった喋り方だった。どうやら走ってきたらしい。確か、桐生の中学校からは、10キロ近くあった気がする。そこから走ってきたわけ？

「…誰だっけ」目の前にいる相手に向かって言う。確か、昨日桐生の隣にいた3年だった気がする。

「そんな…ことより…」酷く息づかいが荒い声で訴えようとする。

言葉が途切れ途切れになっても話したいことがあるのだろうか。まあ、宛なら色々はあるのだが。

「お前、柘榴に何があったか知ってるのか？」やはり異力のことか。確かに今まで、自分より遅かった奴が、いきなり速くなったり、人が倒れたりしたら誰でも不思議がるよな。

「練習したんじゃない？」

「は？何言ってるんだ？柘榴の様子が変なんだよ！！」
「変？」

「アイツ、部活で俺が話しかけたら、いつもと違ってて…」

まだ部活やってんだ？だろうな、あの陸上バカは。俺なんか負けたくらいで、あんなに凹むような陸上バカが止めるはずない…か。それは人を犠牲にしてもか、柘榴？我心は峰里に話を促す。

「アイツ、俺に何て言ったと思う？…お前みたいな遅い先輩に話すことなんかない。そう言ったんだ」我心は頭の中の霧が晴れたように、峰里を見る。

「アイツ…」我心は言い終わらないうちに駆け出していた。

異力（イリヨク）×ヤツアタリ

「桐生^{キリユウ}いる？」近くにいた陸上部員に、柘榴^{ザクロ}の居場所を聞く。1年生らしい。一生懸命ボール拾いをしていた。

「我心さん！！」柘榴を抜かしたという有名人の姿を、驚き混じりで見て、柘榴を指差した。

「・・・でも今、柘榴先輩には近づかないほうがいいですよ。さっきから何を話しても、黙れの一点張りなんです。機嫌が悪いみたいなんです。いつもはこんなじゃないのに」

「忠告どーも」そう言いながら柘榴に近づく。その緊張感の中を、「我心さん！！今度サイン下さいっ」張り詰めた空気がゆるゆるになるような声で言う1年。当の本人は目を爛々（らんらん）と輝かせている。

俺のサイン？もらってどうすんの。そんな想いをしながら横目で見やり後ろに向かって、ひらりと手をふる。それを見ると、芸能人を見た時のファンように、きゃーなんて喜んぶものだから、余計に気が抜けた。

「桐生、来いよ」柘榴は、振り向く。我心を見るなり睨^{にら}みつける。

「お前に話はない」

「こっちはあるんだよね」にーっと笑った末、柘榴のTシャツを容赦^{しや}なくつかみ、そのまま引き摺^ずって行った。周りの部員たちは、その力に目を見開く。さっきのボール拾いをしてた少年もだ。そしてその勇士に期待する。

「部活中だ」

「見れば分かるよ？あんたがふざけたことやってるって聞いたから来てみたけど」

「・・・」

「何やってんの？」いつもの笑顔ではなく、睨むような目。この前より本気で怒ってるのが分かる。

「…関係ない」我心は、確信した。ついに柘榴も自分と同じような心になってしまったことを。

「…そもそも」柘榴が口を開く。

「俺を変えたのはお前だろ？」我心の鼓動が高鳴った。

「この孤独感、我心だけは知ってたんだ。本当にこれ以上苦しむ人を見たくなかったのなら、もっと必死に止めることもできた筈だ」

「…」返事に詰まる。

「お前だけは…知ってたんだ」追い詰めるように繰り返す。

「…」

「何とか言えよ」

「…止めたよ。俺は」

「止める止めないの話じゃない。実行するかしないかの話だ。止めさせようとしたって、この異力の短所を言っただって、実際に移したのは…お前だ、我心」

「本人の意思を主張したまでだけど」

「だったらお前は、酒を飲みたいっていう子供に、飲ましてあげるのか」

「…」

「変わりないだろ？本人が欲して、それを実行したことには」我心の顔が強張った。柘榴の迫力によってではない。目の前にいる人物が柘榴とは思えなかった。柘榴のことなんて、これっぽっちも知らない。それでも、こんな暗くて重い雰囲気は柘榴じゃないと断言できる。

確実に柘榴は追い詰められている。そして俺も…。

「…1つだけ。方法がないわけでもない…」

「本当か！？それを早く言えよ。俺、何でもする」柘榴は、我心が言い終わるより先に飛び上がった。喜びが、顔に溢あふれている。

「お前が他人に言った、黙れとか、俺より遅い奴に興味はないとか

は機嫌が悪かったから口走ったことにしとけばいい。だから普通に元の生活に戻ることも間違いない。方法は簡単：でも7日後かな」「今やらないのか？」

「それなりの準備があるし。そうしないと、あんた潰れるよ？」

「分かったって。俺は何もしなくていいのか？」焦らすような、嬉しいような曖昧な表情を浮かべる。

「必要ない」そう言う和我心は、来た道に戻っていかうとした。

「我心！！」柘榴が叫ぶ。その声に合わせて我心も振り返った。

「ありがとな」ニツと笑って、柘榴が手をふる。

これが普通の友達との会話だったら：やめやめ。こんなの俺らしくもない。

「じゃあな」そういう我心の顔は、陰^{かげ}っていた。しかし、柘榴は我心も笑っているだろうと、勝手に思い込んでいたため、そのことにさえ、気づかなかった。

異力（イリヨク）×ヤツアタリ（後書き）

最近学校が忙しくて、なかなか更新できません；；
とりあえず、空いた時間を使って書いていこうと思いますので、暖かい眼で見えてあげてください（笑）
ここまでの御愛読感謝しております！！

雨×疾走

苦痛を超えれば

翌々日になっても、隼都ジュントが学校に来ることはなかった。その代わり、その日に俺を待っていたのは1つの悪報だった。

「えっとー今朝、小東コレガシの家から電話があつてよ、肺を壊して入院だそう。見舞い行つてやれよー」面倒くさそうに話す担任。もっと心配するべきだ。聞いているだけで苛いらだ立つ。

そんなところ、我心とかぶらせても良いことないぜ？あんたもいい年いってんだから、新しい人生歩んだら？…って言いたいとこだ。あれ？俺もアイツに似てきたかな。

「見舞い…か」今日くらい行つた方がいいのかもしれない。隼都のためにも、自分のためにも…。

そう思つても、いざとなつたら足が竦すくんでしまう。そんな事言つてる場合じゃないっていうことぐらい分かつてる。たとえ隼都が、俺の力による気絶だと知つていようが知らなかりうが、自分の心がそれをしたことを許す筈がない。

病院の一室を静かに開ける。隼都以外は誰もいなかった。ほっと胸をなで下ろす。隼都は音に気付いたらしく、読んでいた漫画から顔をあげた。

「おう！ざっくん。久しぶりやん。1番最初に来る思つてたのに、意外やなあ」それは柘榴のせいで気絶したと知つての言葉だろうか。鼓動こどうが速まる。

「1番の友達やろ？それなら気絶した当日に来なあかんやん。ちなみに気絶より肺なんとか…って病氣なんやけどな。持病…なんかなあ？」

「かなり突っ込みどころある言いぐさだな」

「友達ってどこか？」

「違う！」自分の病名くらいはつきりしろよ、と言いたかったのだが、あえて言わない。

「じゃ、俺のこと友達思ってくれてるんやな」と、とびきりの笑顔を見せる。

「そんなこと大っぴらに言うなよ」他愛もない会話に胸がキリキリ締め付けられる。隼都は自分の病気のせいで気絶したと思ってる。罪悪感。何もかもが今すぐ戻ってしまえばいい。それが無理なら俺の記憶をなくしてほしい。何も知らずに、隼都の病気のせいだとへらへら笑っていたい。笑いたくても記憶が邪魔をする。先輩に勝ったあとに触れた手。昨日何をしたかも曖昧な癖に、嫌な記憶はより鮮明で。目の前でドラマの生撮影を見せられているようだ。

「ざっくん？」

「：ああ。それより起きていて大丈夫なのか？」

「心配せんでもええて。めっちゃ元気やで」

「心配じゃねーよ」

「またまた照れちゃって」柘榴は黙る。それから不意にこんな質問をした。

「お前、俺のこと恨^{うら}んでるか？」

「何で？ああ、俺が気絶したとき、何もできへんかったことか？先輩に聞いたで。あれは気が動転してたからしょうがないって…」

「違^{イリ}うんだよ！！」元々、真実を知らない隼都にこんな質問をしたって、何を言っているのか意味も分からないだろう。自分の異力のせいだということを知らせたくはないのに、俺をもっと責めるべきなのではないかと思う。その矛盾に心が痛む。もっと恨んでくれ。そう心で呟く。俺は、お前に友達だと思われる権利なんて持ってないんだ。こんなこと隼都に言ったら

「友達ってのは権利とかで決めるもんやないやろ。俺が信賴してる奴が友達なんや」って笑って言ってくれるだろうか。無邪気で、純粹な心を持つ隼都。隼都が我心^{ガシン}のような性格だったらこんな思いは

しなかった。ふとそんな事を思った。ここでもまたアイツのことを自然と思い出している。我心と俺。友達とは、大分だいぶんかけ離れた関係で、磁石の同極のように反発しあう。俺はアイツが嫌いで、我心は友達そのものを否定する。そんな関係な奴なら皮肉を言い合えただろうに。言葉に詰まる。

「：いや、何でもない。何か思い出すと頭痛あたまいたくなってきた」

「思い出さんでええ。俺の言葉で苦しんでるなら謝るわ」謝らないでくれ。その同情に苦しんでるんだ。しかし、あと5日もすればこの出来事は全てなかったことになる。隼都も、もう少しすれば元気に学校に来ているだろう。残るのは俺の罪悪感。果たしてそれで本当にいいんだろうか？まるでニュースアナウンサーのように自分に問いかけてみるが、答えは返ってこない。

「また来る」

「ああ。：と言っても、そんな重い病気やないから後数日で退院やけどな」

「無理はすんなよ。じゃあな」
「おう！」

苦痛30%。見舞いに行ったことは、己の気持ちを軽くした。むしろ、プラスでさえある。その気持ちを糧かてとして、土曜日だというのに今日も学校へ向かう。いつもの通りの午後練。しかし風は強く、遠くの雨雲が急速に近づいている。部室に行く足が逸る。

部室に着いたとき、空はもう雲に包まれていて、最初はポツポツと降っていた雨も直に激しくなり、地面がみるみるぬかるんでいた。

背中を壁に預けてみる。湿気のせいで、クセがいつもよりうねっていた。

鬱陶うつとうしい。部活なんてできる筈はずもない。誰もいない部室：こんな

ことなら天気予報をちゃんと見ておくんだっただけ。

雨：この天気が今の自分の心のような気がした。悪いのは自分だ。それを我心のせいにして……。アイツは俺を止めようとしていたのに。それを俺は聞かないで……。あとで我心に謝るべきか？あとでいつ？能力を消してもらったときでいいか。謝るなんて俺の性分しょうぶんじゃない分、恥ずかしいし。でもその恥ずかしさよりも、謝りたいという気持ちの方が強い。会って謝りたい。なんで俺はあんなに我心を責めたんだ？

我心を悪く決めつけていた自分と、それにイラつく自分。心の中が狂ったシグナルのように、色を放ったり消えたりする。

この天気のように、なんとか隠そうと、なんとか紛らわそうと……。表面上は笑っても、心の片隅はこの雨のように、強く激しい感情が渦巻いている。「やめろ」と……。そう言っているようにで。

空を仰ぐ。

天気を晴らすには……。心を晴らすにはどうすればいい？嫌な天気だと思いたくない。それは自分の嫌な心を永久放置してしまうことになるから。走れないなんて諦めつけるようにはなりたくない。それは謝ることさえもできない臆病者になることになるから。

だから走りたい。この天気が自分の心なら、それを超えたい。どんな場所でもいい。どんな環境でもいい。だから、この力強い蹴りで大地を踏みしめたい。勢いよく駆ける。今までにない走り。きつと先輩と走ったときよりずっと速くなっている。雨が目に入り、景色がぼやける。それでも良かった。地の心地良い感触さえあれば。

夢×不吉の前兆

「血圧低下！！」

「緊急手術だ！！準備しろ！！」

「はい！！」話からしても、ここは病院らしい。白い壁、長い廊下、そこへ立つ。感覚はない。そうかこれは：

ちちち：ちちち：目覚まし時計の音で飛び起きる。

「夢か：」久々に夢を見た。昨日病院に行ったせいかもしれない。

柘榴^{ザクロ}は伸びをして、関節が鳴る音を聞いた。そのまま起きると、窓を開けっ放しにして寝ていたことに気づき、欠伸^{あくび}をしながら閉めようとする。

「桐生！」下から呼ぶ声が聞こえた。ぼける目を擦る。すると、家の前の通りに我心^{カシン}がいることに気づいた。

「こんな朝早くに何だよ？」

「それより早く降りてきなよ」手を寒そうにポケットに入れる。時計は5時を指していた。面倒くさがりなアイツがわざわざ早起きまでして来たのである。それなりの理由があるのだろう。

外に出る。いつもより肌寒い。

「俺、いつもギリギリで学校行くんだよね。学校近いし、2分あれ

ば間に合うから、15分前に起きるようにしてるわけ。朝ご飯より10分の寝る時間の方が大切！」そう言いながら欠伸あくびをする。

「猫みたいだな」

「正解。それ俺のあだ名。担任が命名したんだけど。いつも寝てるのに、いざとなったら猫のように素速いとか、誰が教えたわけでもないのに、餌にありつく方法を知ってるとか」

「餌にありつく方法？」

「つまり、授業中話を聞いてない癖に、問題を解く方法を知ってるって意味。頭良ければ良い職につける。そしたら餌：じゃない生活に不自由はないってのが担任の考えなわけ。精一杯の嫌いやみなんじゃないの？」

「そりゃあいい。俺も今度そう呼ばせてもらおう」

「冗談言いに来たんじゃないんだけど。そもそもこんなこととしてていいわけ？」

「どういう意味だよ」

「隼都ジュントがヤバい状態だったこと」

「ヤバいって…元々がヤバいだろ」

「それが悪化したっぽい。今、生死をさ迷ってるところじゃない？」
「は…？」

異力（イリヨク）×運命（サダメ）

「冗談だろ、それ！！」柘榴^{ザクロ}は含み笑いを浮かべる。

「どうせ、いつもの冗談なんだろう？」我心^{ガシン}は首を縦に振らない。

「デッドオアアライブなんて良い響きじゃない？」

「ふざけんなよ」

「ふざけてなんかないね。早起きしたくもないのを、わざわざ来てやったんだから感謝してほしいくらい……って」我心はたと柘榴の顔を見る。色をなくした身体^{からだ}に震えが走っている。

「何もあんなだけのせいじゃない。持病だったんだから」

「違う……」

「何が違うのさ？」

「持病を悪化させたのは俺だ……」

「あのねえ……」

「もう隼都にあわせる顔なんてない」顔を苦痛^{ゆが}に歪める。

「アイツはきっと待ってるよ？」

「待ってなんかない！！そんなこと思われる権利なんかないんだ！！」

「じゃあ何？今、アンタができる事って何？そいつを放っておくこと？」

「放っておくんじやない。俺のことを……」

「そうやって目を逸^そらして……自分の仲間が朽^くちゆくのを待ってればいい」唇を噛み締める。

悔しい。そう言われることが？そんなつもりなんてない……でも現実
は我心の言葉通りになってる。どうすればいい？自分のせいで死ぬ
かもしれない仲間がいるとしたら……何もしてあげられないのだとし
たら……

「桐生、現実から目をそらすなよ？」 そうだ。最後まで見放さない。
それこそ俺の運命さだめだろう？

何かが吹っ切れたように我心を見据える。

「俺行ってくる」 そう言って家にジャンパーを取りに行こうとする
がその足を止め我心の方に振り返る。

「我心も行くか？ …て」 そこにはもう我心の姿は無かった。

手紙×存在

「柘榴君やないの！！」驚きながら走ってきたのは隼都ジュントの母親だった。

「さっき、手術終わったとこなんやで」あまり寝ていないらしく、目の下にくっきりとクマをつけている。

「隼都は…」

「ごつつ生きてるで。ただ…」

「ただ？」

「…意識が戻らへんの」

「意識が…？」

「医者の話では、もうそろそろ戻るらしいんやけど…。今はまだ会わんほうがええ。でも、これは渡さんとあかんかな」それは一通の手紙だった。

「これは？」

「手術前に隼都の病室で見つけたんや。もちろん中、読むような野暮なことはしてへんで」そして笑ってみせる。弱弱しい笑みを何とも言えずに見ていた。手渡された裏を見ると、確かにざっくんへと書かれている。懐かしい筆跡。メールで済ます現代には、少し古風な印象があった。

「ありがとうございます」

「ごめんな。また意識戻ったら連絡するわ」そして悲しそうにその瞳が翳かげった。

本当は一番悲しいに決まっている。それを隠して更に苦しんでいる。俺の力のせいで、皆が不幸になる。隼都の顔がよぎる。そこでふと

我心^{ガシン}の顔を思い出した。そういえば、慌てすぎて謝ることさえ忘れていた。隼都はもうすぐ目を覚ます…と信じよう。その前に、我心と会ったほうがいいのかもな。そんなことを思いながら帰っていた。「そういえば手紙…」封を乱雑に破る。手先がもう少し器用だったら、美術の成績も上がるだろうか。

切れ端が風に吹かれて飛んでいく。自分の字よりもずっと上手い、少し右上がりの文字が顔を覗かせる。それだけで安心した。今ここに隼都の存在があるようで…

手紙×真実

ざっくんへ

ざっくん、一度だけ見舞い来てくれたやろ？ありがとな。実はその後、思わぬ来客がいたんや。誰やと思う（笑）？それがな…宮城ミヤギやったん。アイツ、俺が寝てると思うたんやろな。ペラペラ喋りしゃべりよったで。「ここは懺悔室ざんげしつかつ」て、ツツコミたくなるほどにな。

だから知ってるんや。お前が力を持つてることも。その力が俺に作用したことも。その話しながら、アイツ悔しがってた。

「俺が止めてさえいれば…悪かった…小東コヘガシ…それから桐生キリユウ」って。仕舞しまいには、座ったまま自分の拳こぶしで、自分の足を殴りつけて、

「桐生は悪くない…全て悪いのは…俺の判断力…」もう狂ったように同じことを繰り返してな。あと、ざっくんに、その力を無くすために1週間期間とったんやて？そんな何もかも幸せはすにいく筈ないやん。なんで今までアイツ、それをしなかった？簡単なことや。

そこで、柘榴は1度それを読むのを躊躇ためらった。視界に入ったその言葉を受け入れることができなかった。

アイツ、死ぬつもりやで。

悪寒が走る。我心が？そんなこと、あるはずない。謝る？…アイツに罪悪感なんて言葉はない。「全て悪いのは俺」なんて…アイツに自分を責めるなんて器用な真似まねできる筈はずがない。自己中で、人に押し付けてばっかで、あるのは仮面状の憎たらしい笑みだけ…。手紙の先を読む。

7日っていうのは…アイツの執行猶予しつこうゆうよなんや。

刹那せつな…痛みを感じる。

「心」という未知なる場所に。

頭で考えるよりも早く体が動く。

気づいた時、俺は走っていた。速く、速くと気が競せって、その度たびに足がもつれそうになる。しかし転こけたりはしまい。1秒でも早く、向かいたい。何処どこに？また始まった自問自答。

決まってるだろ、我心の場所だ。

アイツの真の心を探すためなら、闇の中へもダイブしてやるよ。

本心×無情

「我心^{ガシン}!!」我心は自分の学校のグラウンドにいた。絶対ここにいると思ってた。

以前、合同練習とかで来たことがあって、裏口から入れることを知っている。自分とこのグラウンドより多少狭いが、我心と自分しかないグラウンドはいつもよりだっ広く虚^{むな}しく感じた。

「何?」振り向きざまに聞かれる。何て言えばいい?死ぬな…とか?違う…それじゃ、あの手紙が本当のことだと信じたことになる。隼都^{ジュント}が信じられないわけじゃない。ただ、俺の中の我心はそんな奴じゃないから…受け入れられない。お前はもっと図々(ずうずう)しいくらいが丁度^{ちやうど}いい。

「隼都の見舞い、行っただって?」悩んだ末^{すえ}出てきたのはこの言葉。我心も少し驚いたように目を見張る。

「聞いたんだ?」

「ああ」

「どこまで?」嫌味な笑みを込めた瞳が、標的^{ターゲット}を見つけたように光り輝く。一瞬、血のような赤に染まった気がした。初めて我心の能力を見たときと同じような恐怖が背中を伝う。

「分からない」

「どういう意味?記憶喪失?」そう言ってクツクツ笑う。もちろんそれが作り笑いのことは明らかで。本当は俺が言いたいことなんて分かりきってんだろ?

「お前の口から聞きたいんだ」

「ふーん。そういうこと?そのためにはるばるお出でなさったと?」この、時間を稼いでいるような焦らされているような間に息がつま

る。

「そうだよ。お前の本心が知りたい。そんなにへらへらしてないで、ちゃんと話せよ!!」

「俺が話すとしても？」

「遊びに来てんじゃねーんだよ!! 質問してんのはこっちだろ。質問に答えろよ!!」

「あれ？桐生君が声^{キリユウ}を荒げるなんて珍しー」

「そうやってまた誤魔化すのかよ。人をからかってまで何を隠す？」

「…ふざけんなよ!!」 柘榴^{ザクロ}の拳が我心の頬に飛んだ――――

本心×記憶

どうしてこうなったんだっけ。

ああそっか。あの時からだ：

あの時から、自分に仮面をつけるようになったんだ。

「ちいちゃん」

「千年君チトセって呼んでよ、我心君ガシン。」

幼なじみの千年は、唯一俺のこの力を知りながら、友達という存在を続けていた。今思えば知ってたなんて動詞はおかしいけど。

千年は頭では理解しようとしていたのかもしれない。だけど、冗談と思ってたってこともある。「知ってる」と言葉で表しても人の心は読めない。本人に聞きたいと思っても、もう叶わない。束の間つかの友情も、この力で全て引き裂いたんだから。

その頃の俺は子供にしては無愛想だったかもしれないが、千年に對しては無邪気で、仮面のかの字もなかった。楽しい時は笑い、悲しい時は泣いていた。そんな当たり前のことが懐かしくてたまらない。

千年は、毎日のように俺の家に来て遊んだ。しかし、ある事件がきっかけでその生活が逆転した。

「我心君、見てこの猫っ」ぱたぱたとたどたどしい走りをしてきた千年は腕に猫を抱えていた。重さで千年の腕から落ちそうになっている猫はいかにも苦しそう。

「ちいちゃん、それ降ろした方がいいんじゃない？」

「やだよお。そんなことしたら逃げられちゃうもん」うん、そうだよ、猫もそれを望んでるよ？…とは言えなかった。満面の笑みで猫を眺めている千年は唐突に腕を突き出した。

「ふさふさだよお。我心君も触る？」もちろん首を振る。そうしながら後退り。あとずさり 一步一步千年も触らせようと近づいていた。そのとき…

キキーツ!!!!!!!!!!!!!!

いつの間にか車道に出ていたらしい。車が突っ込んできた。我心は一瞬のうちに千年の腕の中で目を見開いている猫を奪い取り、歩道に投げ、そのまま千年を歩道に押し込んだ。猫ごとそれをしようとしたら猫の重さによって、きっとそれは失敗していただろう。だから猫を投げたのだ。猫は高い所から落ちても無事着地するという噂を耳にしたことがある。しかし今回は…

「大丈夫か！」車内から急いで人が出てくる。

「良かった。無事だったんだね。おお、よしよし怖かったよね…」泣いている千年を見て、その言葉を繰り返す。

「…猫が…」しゃくりあげながら声を絞り出す。

「猫が…死んじゃった」

「猫…？」歩道に倒れている猫が、車に轢かれてないことは明らかだった。猫の屍はどこにも傷をつけず、美しいまま眠りについてた。

男はそろそろと猫に触れる。

「本当だ…死んでいる…」その声を聞いて、千年は泣き声を張り上げた。

「…どうして？」我心を見つめる。

「我心君!!」叫びのような声を出す。

「ほらほら、どうしたの。彼も困ってるじゃないか」男はなだめようとするが、千年は聞く耳を持たず駆けだした。

その日、千年はこの世から姿を消した。殺人犯の手によって。後で知ったことだが、犯人は俺たちを轢こうとした男だった。飲酒運転をしていたことが千年の位置からは見えたらしく、出世コースを歩んでいる自分としては、そんな一大事はあってはならない…というのが犯人の動機。それを黒い笑みでスピーチする犯人の顔がちらつくたびに生きている意味を考える。こんなひどい仕打ちをされるために生きてきたのだろうか、と。

千年は俺の家に来る途中だったらしい。千年の母親が泣きはらした目をして言った。

「我心君、交通事故にあいかけた千年を助けてくれてありがとう。…千年ね、そのお礼を言い我心君の家に向かったのよ。それから…よく分からなかったけど、今日中に謝らないといけないことがあるって言ってね。暗いのに大丈夫って。それから…」千年の母は俺のことを恨んだろうか。俺さえいなければ、千年は助かったのかもしれないって。

その時の俺は、何が何だか分からなくて、次の日になれば、また千年は来るんだろうかと思ってた。でも、当然来るはずもなく。本当にそのことを自覚した時、言い知れぬ不安が胸をよぎった。大切にしていたものを無くした時の悲しみを知った。物心ついてないときであれば良かったのに。現に俺は千年と巡り合う前の記憶は何一つないのだから…

この異力を持ってる俺は、幼稚園からの記憶がくっきり昨日のことのように思い出せる。その日に食べた夕食のおかずさえ覚えていくくらい。この異力を持ってるからこそ無くしたものは数少ない。

プライド、体力、学力…全てが人を超越ちようえつしていた。その俺が、唯一ゆいいつ人生で無くしたもの、唯一人生で忘れてしまったもの…

友情…

「我心^{ガシン}？」突然、現実に戻された。

「お前、泣いてんのか？」そう言われて気が付いた。頬を雫が伝う。雨じゃないかと疑うくらい、それは無縁なもので。

「分からない」ポツリと呟^{つぶや}く。それをじっと見つめた。

「悪い。つい殴^うちまって……避^よけると思ったから」

「思っていないしょ？思ってたら、こんな強く殴らないんじゃない？」

「お前、痛くて泣いてんのか？」

「まさか。痛かないって。あれ？あ、違う。痛いけど、痛くて泣いてるわけじゃないってこと」

「んなもん分かってるって。なんで泣いてんだって聞いてんだよ」

「泣いてるんじゃないって。目に塵^{ゴミ}でも入ったんじゃないの？」

「嘘^{ウソ}つくな。はっきり言って、そんなことどうでもいいんだよ。隼^{ジュ}都^{ント}が言ったことが本当かどうか聞いてんだ」

「本人に聞くんなんて反則じゃない？」

「コントしてんじゃないやねーんだけど？」そう言うと、我心は始めたばかりのニヤニヤ笑いをやめた。少しは真剣になったらしい。

「その話が本当だとしたら……あんたは何をしに来たわけ？」

「止めに来たにきまってんだろ」

「罪人と善人を同じ秤^{はかり}にかけるのか……くっ……笑わせる」

「罪人……てのはお前のことか？ってことは善人は隼都のことだろうな。確かにそうかもって言いてえけど……」そこで一度言葉を切る。

「目の前から消える命と生きている命を同じ秤にかけるような奴に

言われたかねーよ」

「あのまま、隼都が目覚めなかったらどうするつもり？」試すような口ぶり。いつもの我心だ。

「隼都は生きる」

「証拠もなく言う…それが友情か」我心は人格が変わったかのように冷たく吐き捨てる。こうなった我心は怖い。しかし目の前で命が散るのを見るのはもっと怖いに決まってる。

「そう言われたところで、今さら俺の決意が変わることはないね。沢山の人を苦しめるために生まれたのならば、いつそ斬り捨ててしまえばいい」

「そのためならば自分の命も厭いとわないと？」我心のように聞き返す。「この異力を無くしたいと言いながら、犠牲を出したくないっていうのはあまりにも甘い考えだよ？」

「我心、それは……」

「甘いよ、桐生。角砂糖を蜂蜜につけるくらいに」そして一呼吸置く。

「……もしかしたら、あんたの仲間ってのになりたかったのかもな」

「は？」我心の言う言葉と思えなくて目を疑う。驚いて何も言えない。

「友情、知らないって言ったけど……本当は知ってる」何も答えず耳を澄ます。

「本当に人を傷つけたくない。俺の言葉とは思えないだろうけど」

「……だったら何で始めからそうしなかった」

「は？」

「何で始めから俺と会わずに死ななかったって聞いてんだ」

「桐生、それは俺に死んでほしいと思ってるって捉とらえていいわけ？」

「それとは別の話だ。何でかなんて簡単なことだろ。自分の心に問いかけてみるよ。仮面なんかつけずに。本当は知ってんだろ」

「……」チツと舌打ちする。

「心の中では望んでたんだ。ありえないことだ、諦めろって抑えな

がらもどこかで期待してた。そこで言葉を切り、我心が話すのを促す。我心、自分で見つけろ、そう心の中で念じる。我心は顔を上げ、困ったように笑った。初めての心からの表情だと思う。仮面も何もない、しかし辛そうな笑顔。『今までの苦しみを、解放してくれるの?』とでも言うように瞬きをして頷いた。

「……期待してた。仲間が欲しいって」こんな状況じゃなければ、美しい顔の少年の表情に感動していたかもしれない。少なくとも、クラスの女子の大半は惚れ惚れしてしまっていただろう。柘榴は知らないふりでもするように明後日の方向を向いた。

「俺はお前を仲間なんて認めねー」

「言うと思った。だから……」

「今から死ぬような奴を仲間なんて認めねーよ!!」我心の言葉を遮り、吠えるように言った。我心は目を丸くする。

あーあ。目の前にいる奴のせいで心変わりしそうになる。ポケットの中のナイフを持て余す。なんでそんなに俺を追い詰めるわけ。お前の将来弁護士?……なんてね。こんな時でも冗談言えるんだな、俺。そもそもこの世に居ちゃいけないのにね? ほら、日も沈もうとしてるじゃん。このままじゃ埒があかない。ポケットナイフを日の下に晒す。

「俺を止められるならね」ニヤリと笑う。そうだこれだ。これが一番性に合ってる。最後までいい悪役でいさせてよ?

「させるかよ!!」我心の力は思ったより強かった。細い腕に、どれだけの筋肉が備わってるのか。それでも……

「お前を死なせるのは!! 絶対にいやだ!!」そう言ってナイフを

叩き落とす。それでも我心は顔色一つ変えない。ニヤリとした笑みは刻み込まれているようで。我心はこうなることを予測していたに違いない。突然ポケットにずっと突っ込んでいた手を出したかと思うと、人差し指と親指を立てる。

そしてその手に生えている鋭く長い爪が我心の胸を貫いた――――

血×懇願

鮮血が迸る。^{ほとばし} 柘榴は啞然^{ザクロ あぜん}とした。どうして……？ そう言って我心^{ガシン}の体を支える。柘榴の異力是我心のコピーのため我心に害を与えない。柘榴も、隼都^{ジュント}が倒れた時のように動けなくなるようなことはもうなかった。もしかしたら、始めからこうなることをどこかで予想していたのかもしれない。我心は何をしようと、どうやって止めようとも自身を始末すると。

傷口を抑える。貫いたといっても、所詮^{しょせん}凶器は爪だ。そんな大きな傷ではない。しかし、放っておけば死に至るだろう。

「いい：助けるな」口から滴る血を拭いながら、それでも柘榴を押しつけるようにする。その手はあえなく空^{くう}を掴んだ。その手を柘榴はもう片方の手で握る。

「馬鹿だろ、お前」手にピリツとした違和感がある。柘榴の異力是我心のコピーなため我心に害はなくとも、柘榴には影響^{むしは}を与える。だから触れ続けていれば少しずつ、毒のようにその身を蝕んでいくだろう。我心には振り払う力はない。異力によって守られてきた我心は痛みを知らない。それが今になって跳ね返ってきたのだ。かすり傷を骨折のような痛みを感じとってしまう我心にとって、今の痛みはどれほどのものであるのか。

「はな……せ」かすれた声で懇願する。

「離すかよ。お前が出血多量なんかで死んだら確実に末代^{たたい}まで祟^{たたり}られるわ」そして少し笑ってみせる。祟るなんてこと、我心はしないだろう。されど、今死なれたら俺は一生それを背負い込んでいかないけない。結局お前は俺を苦しめるんだぜ？ でもそのあとの苦

しみが嫌で俺はお前を生かそうとしてんじゃない。俺を助けるための死なんて、俺は望んじやいねえよ。

「ほぼ……血は止まったな」その時、自分の体内からも熱いものがこみ上げてきた。口を手で覆う。血だ。自分の血。我心から放たれる異力が浸食し始めている。

「やゝめろ」我心が起き上がろうとして、また血が流れ始めた。

「やめるのはお前だ！！無茶すんなよ」そのまま手を我心の傷口に被せる。その途端、火花が散った。

着信×真実

火花が散ったと同時に、柘榴^{ザクロ}は異力の気配^{けはい}が無くなるのを感じた。電氣のようなピリピリがなくなる。

そのとき、突然着信音が鳴った。音源が我心^{ガシン}のポケットからだときり、目をむく。コイツでも携帯を持ってるんだな。つか誰にかけるんだよ。そういう疑問を残して、我心に聞こえるように、スピーカーモードにしながら代わりになる。もしもしを言う前に、合成了たような声が響いた。

「ハッピーバースデー！！我心」嬉しいように、声を跳ねらせる。

「今日は君の呪いがとれた記念日。新しい君の誕生日♪」

「誰…」柘榴が恐る恐る聞こうとすると、我心がそれを制した。

「我善^{ガゼン}か…」

「なんだ。分かっちゃった？」知ってるのか？と柘榴が聞く前に、地声で携帯から答えが返ってくる。

「それに俺様のことは、我善じゃない、兄上、もしくは兄君と呼びなさいって言ってるっしょ？」

「兄ィ!？」携帯と、我心を見比べる。今まで兄弟がいるなんて言っていないじゃないかと、口をパクパクさせる。

「聞かれてないし」携帯の相手に聞かれないように呟^{つぶや}く。

「我善…お前今何してんだよ」いきなり声音が変わる。初めての我心の様子に柘榴は戸惑^{とまゆ}いを隠せない。

「血の接触。制限はそれだけ」

「は？」会話になっていない。相手はこっちの話を聞く気がサラサラないらしい。言いたいことだけ言って切るつもりなのだろうか。

「そこに誰がいる？その異力^{イリヨク}は血液の接触により解除される」我心

はニヤリと笑った。

「やっぱり：我善の仕業しわざだったんだ？」

「あれ？知ってたの？決めつけなんて心外だなあ」素すっ頓狂とんきような声が我心を更にイラつかせる。

「今すぐ出てこいよ！！」いきなり我心が怒声を上げた。

「我心。まだ動くな！！」柘榴は全く話が読めないでいる。何が我心を怒らせた？

「君だね。俺は我心の兄、我善。君が鍵キーなのか。名前は？」我心は首を振る。答えるなどということだろう。

「あれ？シカト？君、我心がこの能力を持った成り行きとか知りたくないの？」

「：成り行き？生まれつきじゃなくて？」

「ハハハッ。君、面白い子だねー。生まれつきでこんな能力持つてるわけじゃないじゃん！：で聞きたいの？聞きたくないの？」知りたい。必要以上に胸の中でその思いが募る。しかし：。

「：知りたくない」我心が言うまで俺は待つ。知りたくたって、それが我心の答えなら、聞かないでいることだってできる。

「あれ？意外な答え。やーっと会話成立したのに。まっ！気が向いたらまた電話してあげるよ」そうして切れる。

随分勝手な電話だった。会話が成立した？そんなことない。一方的な話を突きつけられただけだ。それでも一つ分かったことがある。我心と我心の兄貴はかなり仲が悪い。話からも微妙に分かった気がするが：我心の異力は兄貴が関わってんのか？

「知りたい？」我心が微かすかに呟つぶやく。どうやら顔に出てたらしい。だから小さく頷うなずいた。

「：でも今は：話さなくていい」そう言って速すみやかに救急車を呼んだ――――

一時×笑み

また来ちまった…

清潔感溢れる白い壁と薬の匂いが漂うこの場所。消毒薬の匂いはわりかし好きだが、医学関係の職業には全く興味がない。隼都ジュントが退院するからもう来ないだろうと思ったのも束の間つかか…

目の前で寝ている我心。横蹴りでもくらわしてやろうかと思うほど、すげー良い顔して寝てやがる。どんな回復力？

その寝顔にこっそり口づけしようとする俺…ではなく隼都。その瞬間、我心ガシンは目を開けた

「ちょ…待っ…!!」

ガッン!!

鈍い音と共に隼都が頭を押さえる。

「痛っ!!!!」 「いやいや悪いの君だからね? と、冷たい二人の瞳が隼都を見据える気づかないうちに、にやけてたらしい。もともと無表情なことが多いから不思議そうに見られた。

「クールで噂の桐生キリユウが何でそんな顔してるわけ? あーゆー趣味の小東ガシに付き合ってるってことはお前も…」

「ないない!! (全否定) ってか噂じゃねーし。イケメンで有名の我心に言われたくねーよっ」

「潰し…」

「潰してあげようか…とは言わせないぜ? 隼都っ」

「はいよ!」 そうかけ声を上げると、上半身だけ起き上がっている我心の背後にまわり、我心の両腕を後ろでブロックさせた。ナイスコンビネーションザクロ (笑)

「おい…」 柘榴ザクロは笑いながらケータイを取り出す。データフォルダから1枚の写真を見せる。

「ちょ…!」

「実はうちの学校の陸上部の女子が勝手に盗撮したらしいねん。そ

れが噂になってファンクラブとかできてるん」

「は？」

「この写真、送ろっかな」いかにも楽しそうな柘榴が見せた写真は、我心の寝顔写真だった。人の寝込みに何してんの？って呆れている我心。

「とりあえず消すことを勧めてあげる」

「消してほしんだろ？そう頼めばいいじゃん？」さあ、人にものを頼む態度は？という2人の期待。

そのとき隼都のポケットからバイブが鳴った。

一時×笑み2

「やべっ。もうこんな時間になってたんか」

「何か用事？」

「ピアノお」と言う隼都は見るからにテンションがだだ下がり。

「ピアノ!？」ありえないだろ。何があった!？」

「音楽の内申でもあげるつもり？」成程。それも一理ある。

「ちゃうちゃう。なんかピアノやってる男子かっこええから、あんたやりなって…」母親か。それにしても隼都の母親は何でもやらせたがるな……やらせてはやめてを繰り返して。きつと、うちの学校で習い事した数トップだぜ。

「つまり操り人形」

「そうきっぱり言わんでもええやん。毒舌ざっくんっ」

「じゃあ柔らかくマリオネットなんてどう？」

「宮城^{ミヤギ}まで何言うてんねん!!…て、ああゝ親^せから急かしメールがあああゝ」

「「いってらっしゃい」」2人で笑顔を向ける。

「覚えてろっ」舌を出した後に笑みを残して、隼都はその場を後にした。

「桐生^{キリユウ}」柊榴^{ザクロ}は、突然声音を変えた我心^{こころ}を遮る。

「屋上…行こうか」

空×友情

いつだかの曇天とは違う、雲一つない蒼空^{そら}。そういえば、我心^{ガシン}から異力をもらった翌日にも、同じように空を眺めていた気がする。学校の屋上なんかよりずっと高いこの場所で、もう何の悩みも抱えずに。

「そういえば：試合さぼっちゃまったな」

「出たかった？」

「いや、むしろ清々してる」

「本当に？」

「あんな状態で試合出て優勝したって後悔するだけだ」

「へえ：」感心するように我心が見やる。身体^{からだ}を預けていた手すりを勢いよく押して前に飛び出た。

「ただ1つ気がかりだとすれば：お前と勝負できなかったことだぜ」曖昧な表情を浮かべる我心。そして一言ぼそりと呟く。

「……いくらでもしてあげる」

「は？」

「勝負ならいくらでもしてあげる、これから」

「……そうだな」柘榴は久々に笑顔を見せた。

「今度は正々堂々と実力でさ！！」

「うん。なあ柘榴^{ザクロ}？」

「ん？」いつも名字でしか名前を呼ばない我心に違和感を覚える。

「何で俺を許せるのさ」苦笑いをしながら我心が問う。

「決まってるだろ？解決したことに敢えてネチネチするような奴にはなりたくない」

「それだけ：か」いつもの口癖を我心が真似る。

「いや：」そしてニツと笑い空を見上げた。

「お前と…友達になりたかったのかもな」

END

空×友情（後書き）

秒速100mはこれにて完結です。御愛読ありがとうございます（
^O^）

これからは秒速200m……つまり二巻として書いていきます。
二巻では我善^{ガゼン}がもっと食い込んでくる予定です。よろしかったらそ
ちらもお読み下さいV（^ー^）V

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1195s/>

秒速100m

2011年10月8日23時03分発行